

全学FD・SD研修

第5回 福山大学教育改革シンポジウム

主催 福山大学大学教育センター

**言語教育を考える 報告**

---



第5回 福山大学教育改革シンポジウム(全学FD・SD研修)  
主催 福山大学 大学教育センター



# 言語教育を考える

**問題意識** グローバル化する社会を生きていかなければならないと言われ、英語の力が必要だと言われている。しかしながら私たちは、グローバル化以前のところで、学生たちの足元を支える言葉の力を育て、彼等のキャリアを広げていく必要に迫られている。

学生の多様化が進むなか、学生の言語能力をあらためて問い直して見る必要がある。学生の思考力、コミュニケーション力に問題があるのかどうか、私たちは日々どのように実感しているのだろうか。

**言語教育とは** 学生の言語能力の事態を改善していくためには、各学部・学科に通底するものとしての「言語教育」を構想し、学生の言語能力に関する問題意識を共有化し、教員間の全学的な有機的連携を図ることが必要なのではないかと。

私たちが問い直すのは触媒としての「言語教育」である。共通教育における狭義の言語教育だけを言うのではない。この「言語教育」とは、共通教育とも運動しながら専門各々で営まれる、言葉を軸に定位し直したところの専門教育そのものなのである。

**シンポジウムのめざすもの** このシンポジウムは、本学における「言語教育」の現状を認識し、今何をなすべきなのか、いかなる手立てが可能であるのか、そして学生の未来に何を示唆すべきなのかについて、私たちみずからで探るためのものである。

2018年9月14日(金) 13:00~15:00

福山大学1号館 01101大講義室

〒729-0292 広島県福山市学園町1番地三蔵

参加  
無料

13:00~13:05 学長挨拶

松田文子 (福山大学 学長)

13:05~14:20 第1部 パネラー報告

1. 竹盛浩二 (大学教育センター 准教授)
2. 若松正晃 (大学教育センター 講師)
3. 劉 国彬 (大学教育センター 准教授)
4. 小野太幹 (大学教育センター 准教授)
5. 関田隆一 (工学部 准教授)
6. 内垣戸貴之 (人間文化学部 准教授)
7. 大西正俊 (薬学部 講師)

14:20~15:00 第2部 提言と討論

司会 中尾佳行 (大学教育センター 教授)

〈問い合わせ先〉

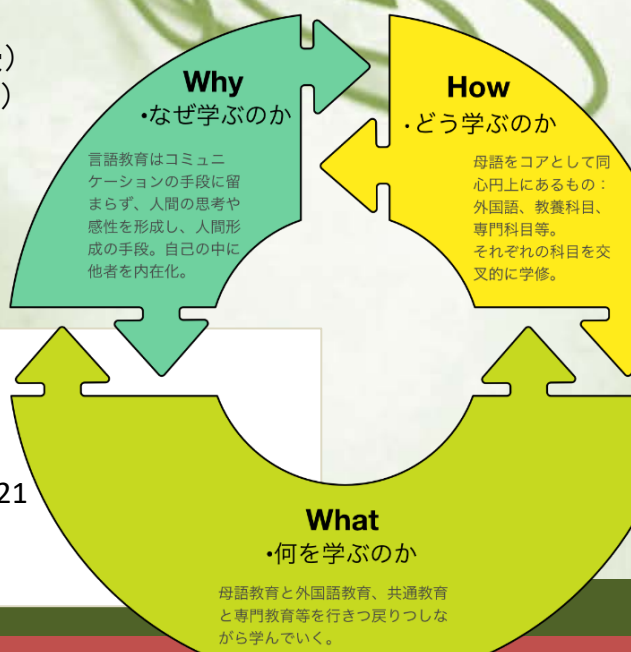
福山大学 学務部教務課 担当:池本

〒729-0292 広島県福山市学園町1番地三蔵

TEL 084-936-2112(代)内線2213 FAX 084-936-2021

MAIL [kyoumu-2@fuedu.fukuyama-u.ac.jp](mailto:kyoumu-2@fuedu.fukuyama-u.ac.jp)

URL <http://www.fukuyama-u.ac.jp>



# 言語教育を考える

## 1 母語教育の現状と 言語教育の課題

大学教育センター 准教授

竹盛 浩二

日本語検定の出題要素の中で、語彙力は言葉の力において重要な因子となる。語彙力には、これまでの読書が影響すると言われている。さて、その語彙力を含め3つの要素を学科ごとに見てみると、学科間格差が認められる。これからの学生と、これを教育する各学科教員が、専門内容に照らしてそれをどのように意識して言葉の力を育てていくのか。共通教育の立場から、その契機としての話題を提供する。

## 2 英語教育の現状

大学教育センター 講師

若松 正晃

平成29年度実施したプレースメントテストに関する報告を行う。その結果を踏まえ、英語カリキュラムを評価するとともに、専門教育への接続を目指したその思想を再確認する。学部学科において、ひいては福山大学として、今後いかに英語をとらえるのか議論したい。

## 3 初修外国語教育を考える

大学教育センター 准教授

劉 国彬

福山大学の初修外国語教育は、開学当初のドイツ語一つに始まり、現在は中国語、フランス語、韓国語を加えた四カ国語となっている。その中で、中国語の履修者が最も多い。学生は、中国語を勉強して、母語に対する再認識、英語との比較、異文化、考え方について変容が見られる一方、「漢字が書けない」「外国語は難しい」等の声もある。国際社会に通用する若者を育てるため、外国語が苦手な学生に対して修得をどのように高めていくか、教師に問われる課題である。

## 4 数学という言葉

大学教育センター 准教授

小野 太幹

使う言葉の定義や、議論の根拠となる共通概念(公理)を定め、論理を積み上げるといった数学の研究方法は、古代ギリシャ時代に確立され、その後

記号の役割が発見された。数学において用いられる言葉や記号の定義には厳密性や自然であることなどが求められるが、それらの要求が論理的で高度な議論展開を可能にする。数学という言葉の特徴の一端を話題提供したい。

## 5 理科系での 正確な日本語を書く教育

工学部 スマートシステム学科 准教授

関田 隆一

工学系は製品安全の視点から精緻な技術文書作成能力が必要で専門教育が始まっている。医療系はその行為が直接人命に関わるが、文章作成と事故の関係性を明らかにした研究が少ない。そこで、医療事故データの解析により薬剤師の文章作成と事故の関係を論じる。また工学部、薬学部の1年生の文章作成能力を小論文作成により計測した。そのデータの統計解析結果を基に理科系で正確な日本語を書く教育を提案する。

## 6 言語教育は「メディアと表現」と どのようにつながるか

人間文化学部 メディア・映像学科 准教授

内垣戸 貴之

言語はそもそも「メディア」である。メディアと表現について学ぶ本学科にとっては、言語教育は非常に重要なものと言えよう。その一方で「メディア」という言葉の語感からイメージされるのは、多くの場合「非言語的な表現」でないだろうか。そうしたある種のギャップに対し、言語教育をどう位置づけるべきか、学科の現状を踏まえて報告する。

## 7 学ぶ意欲向上へ向けての問題提起

薬学部 薬学科 講師

大西 正俊

福山大学薬学部では、薬剤師を目指す学生がほとんどである。そのため、大学本来の学位取得ではなく、薬剤師国家試験合格をゴールと考える学生が多い。国家試験の出題基準に『言語』が明確に定められていない中で、いかに言語教育に興味を持たせられるかが6年制薬学部の課題であり、今後、学問としての薬学を発展させるキーとなると考えられる。

## 1. シンポジウム開催の趣旨

### 1-1 問題意識

学生の多様化が進むなか、学生の言語能力を問い直して見る必要がある。学生の思考力、コミュニケーション力に問題があるのか、あるいはそうではないのか、私たちはどのように日々実感しているのか。例えば、具体的・個別的な経験を語ることはできても、そこからある認識を抽出して論じることが難しい学生がいる。したがって、共通の話題で他者と語り合うことができたとしても、認識を共有するまでには到達できない。これをどのように捉えるのか。

問題があると仮定してみる。その背景として、どのような要因が想定されるのか。核家族化と超少子化のなかで、成長とともに社会性を積み上げることが困難な社会環境。学校教育の前段階における読み聞かせ等の母語環境の課題。経済優先の社会が要請する資質・能力と、学校教育で育くもうとしている能力の実態的な乖離。さらには、思考力を阻害するとも言われる昨今のSNSの蔓延状況、等々。これらは本当にそうなのか、どうか。いずれにしても、これらは彼・彼女一人の問題ではない。その問題の背景とは、社会状況そのものであり、時代状況であるのであろう。

グローバル化した社会を生きていかなければならないと言われている。英語の力が必要だと言われている。とはいうものの、グローバル化以前のところで、彼等の足元を支える言葉の力を育て、彼等のキャリアを広げていく必要に我々は迫られている。我々は、改めて言語に目を向けて、学生の言語能力を育成していく必要がある。

### 1-2 「言語教育」とは

我々には、各学部・学科において、AP、CP、DPがあり、シラバスがある。しかしながら、それらに通底するものとしての「言語教育」を構想し、学生の言語能力に関する問題意識を共有化し、教員間の全学的な有機的連携を図ることができるならば、学生の言語実態に少なからぬ変容が生まれるのではないか。言うまでもなく、この場合の「言語教育」とは、共通教育における狭義の言語教育だけを言うのではない。それとも連動しながら専門各々で営まれる、言葉を軸に定位し直したところの専門教育そのものでもある。

専門によって温度差はあるものの、研究や教育は基本的に言語を通して営まれる。そのなかでの言語への理解を高め、思考する力を共に意識させていけば、事態は改善に向かうのではないか。

### 1-3 シンポジウムのめざすもの

上述の如き、学生の言語能力に関する問題意識をもって、大学教育センターは「言語教育シンポジウム」を企画する。

本学における「言語教育」の現状を認識するとともに、今何をなすべきなのか、いかなる手立てが可能であるのか、そして学生の未来に何を示唆すべきなのかを探ることとなる。

このシンポジウムを契機に領域横断的な視点を持つなかで、一層有効と思える「言語教育」の在り方を探ることは、ひじょうに重要なことであると言える。「福山大学言語教育プログラム」の構築を謳う所以である。



## 2. パネラー報告

### 2-1 母語教育の現状と言語教育の課題

大学教育センター 准教授 竹盛浩二

共通教育において、「日本語表現法」(2単位)を学生は履修することになっている。母語である日本語の思考を表現するということがすべての学びの基本であり、よりよく生きることの根幹でもあったと考えられているからである。そこを見据え、学生の言語実態を見極めながら、この「日本語表現法」を担当している。

母語教育の現状は、多くの課題を抱えている。そのことには後に触れるとして、その克服のために4年前から「日本語検定」をこの授業に組み込み、検定の受検を積極的に推奨している。授業においてレッスンを重ね、6月と11月の年2回の検定合格を目指す。この4年間トータルで見れば、新入生の約60%が受検し、その53%が検定3級を取得している。

日本語検定の出題要素は、敬語・文法・語彙・言葉の意味・表記・漢字の6領域と、総合問題を加えたものである。4月最初の授業では、検定の問題傾向を知るために、過去問を取り寄せて、これに履修者全員が取り組む。自己採点させて集約した全員のデータ(2018年度1年生前期履修者747名分)を分析すると、学生個々で見れば、これらの6+1領域の偏りは様々な傾向を示すが、全体的には、敬語と文法の領域の方が、語彙・言葉の意味・表記・漢字の領域よりも成績が良い。日本語検定委委員会が分析報告した「大学生の日本語力」(2012年)によると、領域ごとの得点率の大学間での差(最高得点率-最低得点率)が大きいのは、前者のいわゆる〈文法領域〉ではなくて、後者のいわゆる〈語彙領域〉の方である。後者〈語彙領域〉に課題があるという本学の傾向は、検定協会分析の、まさに大学生の母語能力の傾向そのものである。



このいわゆる〈語彙力〉は、言葉の力の重要な因子であるが、ベネッセの調査「現代人の語彙に関する調査」(2017年)によると、高校生の語彙力が高い者のうち61.4%は月1冊(ノンフィクション)以上の読書をする。語彙力の低い者では、月1冊以上の読書をする者は43.2%と低くなる。確かに、これまでの読書量が学生の語彙力にならず影響していると言えるのかもしれない。小学生から高校生までの、それぞれ1ヶ月間の平均読書冊数の推移などを把握する全国学校図書館協議会による「学校図書館調査」(2017年)のデータで見ても、高校生の平均読書冊数は、2017年では1.5冊であり、月に1冊を読むかどうかというのは、分かれ目でありそうでもある。

また、国立青少年教育振興機構の調査「子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究報告書」(2013年)では、重要な時期は、高校生ではなくて、「子どもの頃」なのであり、その頃の読書活動と体験活動が多いほど、成人の未来志向や社会性、文化的作法や教養に関する意識能力が高いという結果がある。一方では、再びベネッセの調査レポート「読解力向上と読書との関係」(ベネッセ教育研究開発センター 小林洋 2008年)であるが、読書量が増えても読解力は頭打ちになる(小学校5年生と中学校2年生において)という興味深い結果がある。1ヶ月0冊よりも1~3冊の方が読解力の偏差値が小中ともおよそ3ポイント高いが、これが10冊に迫りこれを超えていけばむしろポイントが下がる。

語彙力や読解力には、読書は大きく影響を与える。とは言っても、すでに子どもの頃に未来は決定されており、いくら読書の量で追いかけてみても、結果は明白である。

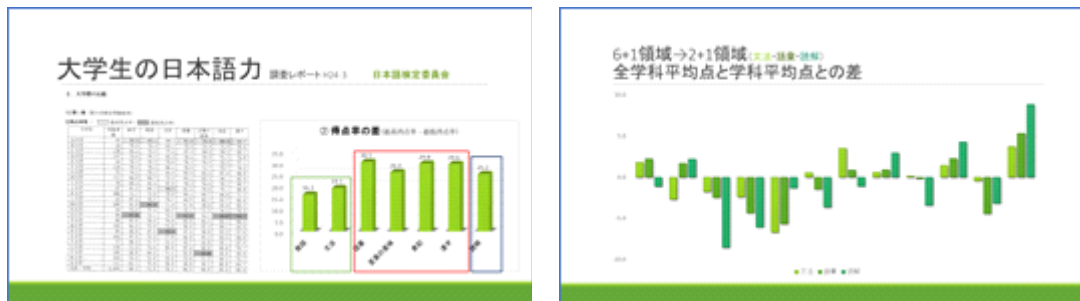
ところで、本学での4月実施の日本語検定過去問自己採点結果に話を戻すのだが、データを学科ごとに整理し、2+1領域、すなわち〈文法〉〈語彙〉〈総合問題=読解〉の3領域でもって、人間文化学科から薬学科まで、12学科別に(機械システム工・建築の2学科

は後期) 見てみることにした。結果は、例えば、〈文法〉は全学平均を下回るが他の 2 領域は上回る学科があり、全領域平均を下回る学科があり、その逆もあり、〈文法〉〈語彙〉は平均を上回り〈総合読解〉が低いなど、様々なパターンのなかで、学科間の格差が認められる。

さて、この学科間格差について、これを偶然の結果とみて座視するのか、日々学生に接している中での実感と重ねながら、各学科学生の傾向イメージを描き、ひとつの実態把握とすることによって、それぞれの専門領域における言語教育の課題を探ろうとするのか、これは、重要な分岐点であるのではないか。

語彙力は言葉の力の重要な因子であり、その語彙力には読書が影響する。しかしながら、読書の量がすべてでもないということもある。学生たちのこれからの学びの方向性に、これは、強い示唆を与えてくれるのではないか。

共通教育を経て、これからの専門教育の中では、何らかの本(文献)を読まないことには専門の扉は開かれることはない。しかし問題は、その読み方にある。これからの学生と、これを教育する各学科教員が、その専門内容に照らしてそれをどのように意識して言葉の力を育てていくのか。言語教育を大きな課題として捉え、大学での学びをどのように高めていくのか。共通教育における学生の言語実態を示しながら、かかる問題を共有することができればと、筆者は考えている。



## 2-2 現状から考える教養としての英語のあり方

大学教育センター 講師 若松正晃

### 1. 英語カリキュラム概要・クラス配置

前提として、教養科目の英語では、英語 I から英語 IV まで、ナンバリング制を採用している。すなわち、下位科目の単位を取得していないと上位の科目を履修することができない。英語 IV のさらに上位科目として専門英語を設け、英語 IV を専門英語をはじめ専門教育への接続科目として開講している。このように、本学では 1 年生から 3 年生までに必修科目としての英語を 6 単位取得しなければ卒業要件を満たさないことになる。

それゆえ、共通教育科目である英語 I から英語 IV の各授業担当者は、英語 I と II は高校英語から大学英語へのスムーズな導入を目指し、英語 III と英語 IV で専門教育への接続を掲げて授業をデザインしている。

そこで、英語科目には学生の学修段階に応じて 3 つのクラス (Advanced・Intermediate・Pre-Intermediate) を設け、学生それぞれの習熟度に即した授業をデザインしている。Advanced クラスは基本的には英語ネイティブ教員が担当し、会話を重視した授業を展開している。Intermediate クラスと Pre-Intermediate クラスには英語ネイティブ教員と日本人教員をバランスよく配置し、4 技能をまんべんなく学修できるようにしている。

### 2. 英語の現状

本シンポジウムでは、本年度 2 年生が前年度 1 年生の時に受けた 2 回のプレイスメントテストの点数を出発点に、本学が抱える問題を提起した。本学では、入学直後 (4 月) に 1 回目のプレイスメントテストを実施し、そのデータを英語 I・II のクラス分けに用いている。2 回目のテストは 1 月に実施し、英語 III・IV のクラス分けに用いている。4 月からの推移を分析した結果、2 回のプレイスメントテストの結果が下がっている傾向にあるこ

とがわかった。直近のデータを見ると、2回目の方が平均で5ポイント下がっている。この下落は、毎年度の問題であり対象年度のみの問題ではない。

プレースメントテストの結果が示しているように、本学学生の試験点数は全国的に見ても低いと言わざるをえない。しかし、一方で、授業をしていて感じることを、モチベーションとしては低くはないのではないかと思えることも多々ある。

事実、2回目のプレースメントテストにおいて、唯一平均ポイントが上がったクラスがある。最下位クラス（Pre-Intermediate）である。理由については、今後精査する必要があるが、直感的にはクラスサイズにあると思われる。というのも、AdvancedクラスとIntermediateクラスのクラスサイズは40名前後の設定に対し、Pre-Intermediateクラスを20名前後のサイズに設定したのである。学生側からすると、教員のサポートを比較的容易に得られるクラスサイズにしたためであると考えられるのである。少人数で授業を開講する最大のメリットは、英語嫌いの根本を本人とともに解きほぐしていく時間的な余裕を持つることにあるのではないだろうか。（筆者も最下位クラスを担当しているが、授業をしていて学生の学修への意欲を感じることも多々あったことも付言しておく。）

これは英語に限ったことではない。語学とクラスサイズはよく研究対象になっているが、ほかの科目でも同じである。その意味で、TOEFLやTOEICなど資格試験の成績を伸ばすためという近視眼的な目的のための授業と考えるのではなく、語学の授業を通して学ぶ方法や姿勢を学ぶための授業として外国語の授業を捉えるべきではないだろうか。長期的に考えて、学ぶ姿勢を身につけるために外国語は少人数クラスでの開講が望ましい。

### 3. 英語力とは何か

よく耳にする「英語力」ということばの解釈は、人や場面によってさまざまである。例えば、プレゼンテーションに主眼をおく場合は、英語で話者の意図を正確に伝えられるように流暢な英語運用能力を「英語力」と考えるだろう。一方、筆者のように、海外文学を原文で読んで言語で構築された作品世界の奥行きを感じたいと思う人は、読解力と同じような意味合いをもって「英語力」ととらえるだろう。

このような「英語力」という言葉への視線の違いが、より広げて考えると、各専門分野による英語への態度の相違（温度差）に表れるだろうと考えている。だからこそ、学部学科として「英語力」の定義、「英語力」ということばで求める能力や資質を示すことがいま必要なことなのではないだろうか。

幸い、今運用している英語カリキュラムは、教養から専門への接続を目指している。上述したように、「英語力」について学部それぞれの考え方があってもよいわけであり、それが学部学科の特徴にもつながっているのではないだろうか。

現在の英語カリキュラムの根幹となっている思想を活かすためにも、学部あるいは学科として「英語力」の意味をいかに捉えているかという意見を求めたい。「英語力」という言葉をどのように理解しているか、その上で「英語力を伸ばす」というのはどういった能力を「伸ばす」のかについて、各学部学科の考えを教えてもらいたかった。

共通教育科目は、高校から大学へと、より専門性を高めるための導入として重要な科目群であり、教養科目だからといって軽んじるべきではない。共通教育科目の重要性に対する各学部の理解が求められるのではないだろうか。それが、学部のスタンス、ひいては大学のスタンスというところにつながっていくように思われる。

筆者は、大学はバラバラになっていて言語化できない自分の思考を秩序立て統制する方法を学ぶ場だともいえると考えている。

本学の現状を鑑みると、先ほど触れたようないわゆる「英語力」を厳密に求めるのではなく、「英語を学ぶことを通して、学ぶ姿勢を涵養する」ことを目指すべきだと考える。ここにおいて、「学び方を学ぶ」という意味を改めて考えてみたい。





### 2-3 初修外国語教育を考える

大学教育センター 准教授 劉 国彬

初修外国語教育は、福山大学の建学とともに開講されてきた。40年以上の歴史を歩んできた福山大学は、その初修外国語の科目は改善しつつ、今日に至ったわけである。したがって、現行の初修外国語の問題点、また今何ができるか、何をすべきかを明らかにするために、初修外国語教育の政策史に鑑みながら述べてみたい。

#### 1. 福山大学初修外国語教育政策史

福山大学は、建学当初、国際社会に通用する若人に育てるため、全人格的教育を行うという教育理念を掲げ、学生が将来、立派な国際人として活躍できる素地をつくるため、外国語を重視とされている。

昭和50年(1975年)建学当初、英語、ドイツ語の二外国語科目を履修することとした。昭和59(1984年)年度から「国際理解とより多い国々の語学を修得する」道を開くため、第二外国語として、ドイツ語の外に、中国語、フランス語を開講した。平成4年(1992年)、一般教育の中の外国語科目はさらに第一外国語と第二外国語と分かれている。その理由は『学生便覧』(平成6年度版)で、こう述べられている。「一般教育では、学問体系を基本にしつつも、その知的体系そのものを教授することに主眼を置くのではなく、流動的で複雑な社会や国際化・情報化の進展に対応しうる全人的な能力の育成を重視し、自ら思考し、判断・推理する力、言語記号等の表現能力・文化を異にする外国語能力などの教育を行う。」こうして、初修外国語を平成28年度(2016年)まで、中国語、ドイツ語、フランス語の三か国語が開講された。



平成21年(2009年)4月に、教育システムに基づく教育改革を目的として、全学的な教育プログラムを統括する組織として大学教育センターが発足され、初修外国語カリキュラムが充実しつつあった。平成28年度(2016年)から、「中級中国語ⅠとⅡ」、平成29年度(2017年)から「上級中国語」と「ビジネス中国語」が開講された。さらに平成29年度から、「韓国語Ⅰと韓国語Ⅱ」が開講され、福山大学の初修外国語の種類を4か国語となった。初修外国語の中で、中国語履修者が、開校から現在まで最も多いため、中国語学習者の声をまとめた。

#### 2. 初修外国語の学生側の声

2018年度前期、学習者側(中国語Ⅰ・中級中国語Ⅰ)の声を例にして、初修外国語の現況の一端を窺うことができると考え、次の表にまとめた。この表で分かるように、初修外国語は独立して捉えるものではなく、日本語や英語の能力お互いに影響し合っていることを意識していることが浮かび上がってきた。

学習者側の声の抜粋	ポジティブ	ネガティブ
言語について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言語の大切さを知った。</li> <li>・国が近いから言語の雰囲気は似ている。</li> <li>・英語以外学んだことがなかったから、実際に学んで中国語に親しみを持った。</li> <li>・日本語で、アメリカは米国、中国語では美国、というように他の国の漢字の違いを調べたい。</li> <li>・すべての言語に歴史があり、それを使う人がいるということ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・漢字が書けないこと。</li> <li>・発音が難しい。</li> <li>・他言語はなかなか理解できず、難しいことが改めて分かった。</li> </ul>
英語との比較について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英語も中国語も基本が分かれば習得するのは難しくないと考えた。中国語を話せるようになれば社会に出ても</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中国語のイントネーションは英語より難しい。</li> </ul>

	<p>役に立つし、いろいろ便利であるのでこれからも中国語の勉強に取り組みたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・英語より分かりやすい、好きだ。</li> <li>・英語が全く分からず、中国語でも無理だと思っていましたが、思いのほど、分かりやすかったです。やはり、漢字だからなのでしょう。</li> <li>・漢字が少しずつ日本語と違ったり、文法が英語に似ていたりする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語や英語に比べて難しかった。</li> <li>・英語と比べてアクセントや発音の違いが多く、覚えるのが大変だと感じた。</li> </ul>
母国語に関して	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語がいかに難しく活用が多いかということ。</li> <li>・自国語が一番簡単だと思った。</li> <li>・国語の古典や漢文の授業ででてくる漢字と簡体字が同じものを見て、大元が中国のものだと改めて実感した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・四声などがあって、日本語に比べたら難しい。</li> <li>・日本の漢字とは少し違ったりしていて難しい。</li> </ul>
異文化について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当たりまえだと思っていた文化が、比較的近い国である中国ととても違うことがたくさんあって驚いた。(割り勘など)</li> <li>・異文化であるために相手を知らない間に不快な思いにさせてしまうというリスクに気づいた。なので、しっかり学んで人間関係が円滑に行われるようにしたい。</li> </ul>	
考え方の変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語が難しいという外国人の気持ちが分からなかったけど、中国語の勉強を通して、その気持ちがいまではわかるようになった。</li> <li>・中国とは、自分が持っていたイメージと違うものだった。</li> <li>・近くにあるのになかなか行けない遠い存在だったが、授業を通して身近に感じた。</li> </ul>	

以上は、中国語学習者の声であるが、すべての初修外国語が共有していることでもあると思われる。ポジティブの面からみれば、学生側は初修外国語の学習を通して、母語と英語との比較ができたことと、異文化への関心と考え方の変化にもつながったと言える。一方、初修外国語は独立した存在ではなく、母語を英語の能力は互いに影響し合っている。初修外国語の場合、英語と違って、統一テストを受けていないため、学生の学力レベルが様々である。1年生の前中間テストの段階で成績がすでに二極化している。もともと学力の低い学生に対してどのように対応するかは大きな問題である。次に、動機付けを高めることは一つの効果的な工夫である。動機付けの一つの手法は文化を教えることである。しかし、限られた授業時間内で、言語と文化がいかに深く関係し合っているかを指導することは教師側に大きく問われた問題である。第三に、再履修者に関して、出席率の低さと成績低下への対応。第四に、学習者のスマートフォン、翻訳ソフトの使用への対応問題等がある。

初修外国語教育の問題点は上述の四つだけではないと思われるが、様々な学生に対応した教育を行い、いかに福山大学の教育理念である「全人教育」に近づけるか、まさに今日の問題である。

#### 【参考文献】

- 『福山大学十年史』「福山大学十年史」編集委員会、昭和60年10月15日発行。  
『福山大学二十年史』「福山大学二十年史」編集委員会、平成7年5月10日発行。  
『福山大学三十年史』「福山大学三十年史」編集委員会、平成17年5月15日発行。  
『福山大学四十年史』「福山大学四十年史」編集委員会、平成27年5月15日発行。

## 2-4 数学という言語

大学教育センター 准教授 小野太幹

数学は数字や記号が統一されており、読み方はわからなくても意味は伝わる。例えば、「3」という数字の読み方は言語によって異なり、言語が違えば発音だけで意味を理解するのは難しいが、言語が異なっても書けば意味はわかる。また、 $=$ 、 $\times$ 、 $+$ 、 $\sqrt{\quad}$ などの記号も読み方は言語によって違えど、書けば意味は通じる。数学という言語の特徴の一つは、書き言葉であり、しかもそれは”universal language”であると言えよう。これら数字や記号の統一は、人に伝えるのが便利になるだけでなく、自らの思考を簡潔に展開できるので思考を整理するのにも役立つ。なお、記号の統一化が進んだのは活版印刷技術が広まった16世紀ごろで、17世紀には現在使われているような記号にほぼ落ち着いたと言われている。

数学では数字や演算記号のほかに、文字もたくさん出てくる。特に、文字を記号としてとらえた文字式の発見は数学の発展に寄与した。例えば、中学校で学ぶ  $x$  を未知数、 $a, b, c$  を既知数とする2次方程式の一般式

$$ax^2+bx+c=0$$

の解の公式は

$$x = \frac{-b \pm \sqrt{b^2 - 4ac}}{2a}$$

によって与えられ、個別に2次方程式を解かなくても、既知数を記号化することにより、その記号（文字）に数字を当てはめるだけで解を求めることができる。このような文字を記号としてとらえた16世紀の発見は、その後の数学の研究に大きな影響を与えた。数学において記号は、表現の簡素化による利便性のみならず、研究対象をより深く理解するための道具の役割をもつ。

一方、書き言葉である数学は、高校以上の教科書、特に大学の教科書や研究論文等で、定義、公理、命題という形式で書かれている。これも数学という言語の特徴の一つである。使う言葉の定義や、議論の根拠となる共通概念（公理）を定め、論理を積み上げるという数学の研究方法や表現の仕方は、古代ギリシャ時代に確立されたと言われている。その集大成が紀元前300年ごろにユークリッドらによって編纂された「原論」であり、現在もそのスタイルは継承されている。

最後に、教育という観点から私見及び個人的な取り組みについて述べたい。上記に述べた記号や文字の役割の理解、論理の丁寧な積み上げの習得には自分で考え、自分で手を動かすことは欠かせない。演習の時間に限らず講義の時間でも、少しでも問題を解く時間を設けたい。また、寺田寅彦は「数学と語学」の中で、「語学も数学もその習得はいつかせいににはできない。平たくいえば、飽きずに急がずに長く時間をかけることが、少なくとも必要条件の一つである。」と述べている。この「飽きずに急がずに長く時間をかけること」の重要性も、小テスト等の実施の意義等とあわせて授業で折に触れ述べるよう心がけている。さらに、論理の積み上げを理解するスピードを確保するよう板書で講義をしている。特に、問題の解答を板書するときは、学生が問題を解く際に論理を自身で構築しやすいようなるべく丁寧に論理を積み上げるとともに、思考のプロセスをどう表現すれば伝わりやすいかも強調し、数学という言語を使った表現力も育てたいと考える。



## 【参考文献】

- 新井紀子：『数学は言葉』、東京出版、2009。  
 安野光雅編：『日本の名随筆（89）数』、作品社、1990。  
 上野健爾：『数学の視点』、東京出版、2010。  
 ジョセフ・メイザー，松浦俊輔 訳：『数学記号の誕生』、河出書房新社、2014。  
 森田真生：『数学する身体』、新潮社、2015。  
 矢野健太郎：『すばらしい数学者たち』、新潮社、1980。

## 2-5 理科系での正確な日本語を書く教育

工学部 スマートシステム学科 准教授 関田 隆一

日常生活で使う消費生活用製品の取扱説明書は、エンジニアが作成する。この取説の不備によって事故に至る場合もあり得る。誤解をおそれずに言えば「医者やメスと薬で人を殺す」、一方「技術者は、機械で人を殺す」のである。更に言うと、その機械は、文章と図面で構成されている。これまでの製品安全の分野では、事故には様々な原因と背後要因があることが研究されており、手順書や取説の不備もその原因の一部となっている。従って工学系では製品安全の視点から精緻な技術文書作成能力が必要であることは明らかになっており、その専門教育が一部の大学で始まって効果を挙げている。医療系はその行為が直接人命に関わるが、文章作成と事故の関係を明らかにした研究は少ない。

そこで、公益財団法人日本医療機能評価機構から収集したヒヤリハット報告と医療事故データについて質的データの対応分析である数量化Ⅲ類をかけて、薬剤師の文章作成と事故の関係を明らかにすることとした。医療事故がその事象も原因も多様であるために、事故全体を説明するためには31個もの成分が必要である。それらの中でも以下に示す上位3位の成分に薬剤師の関与が特徴として表れている。

成分1：事故への文書作成の関与度

成分2：事故発生時に行っていることに疑問を持たない度合い

成分3：事故発生時に薬剤師が確認できる余地の多さ

収集したデータの事故全件について各成分の得点散布図を作成した。成分1を横軸、成分2を縦軸とした散布図を図1に示す。

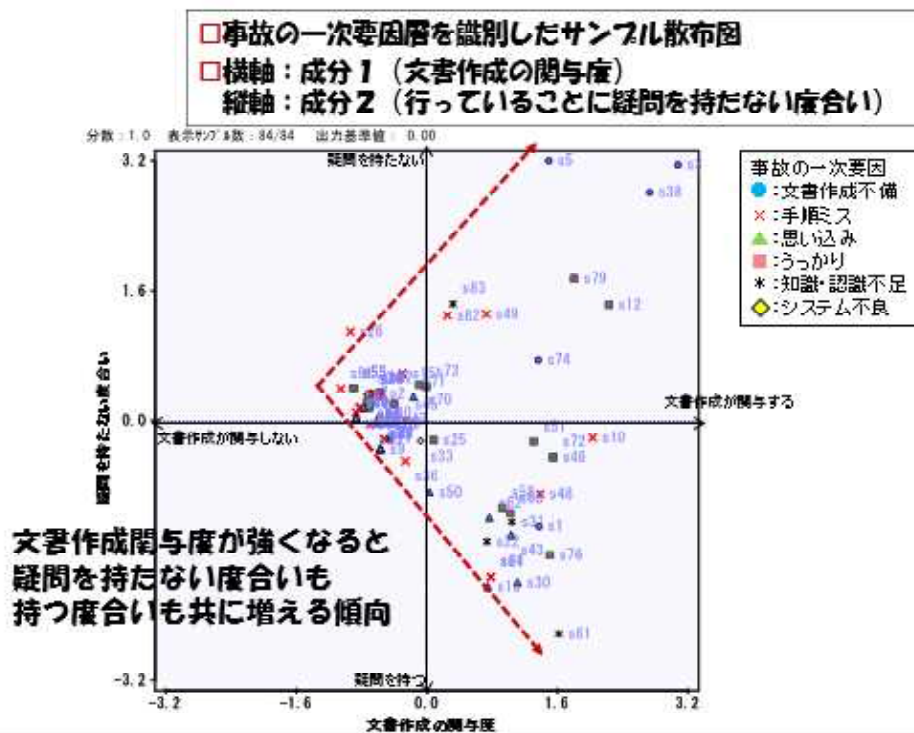


図1 薬剤事故情報 数量化Ⅲ類の成分1と成分2

図でわかるとおり、分布に一定の傾向を識別でき薬剤事故防止対策を考察できるが、文章作成の正確さより「思い込みやうっかりの撲滅」及び「確認プロセスの形骸化解消」の方が重要という結論である。もちろん薬剤事故防止に文章作成能力は寄与が少ないということではない。

工学系、薬学系で、日本語文章作成能力が重要であることを明らかにしたので、次に工学部、薬学部の1年生の文章作成能力を小論文作成により計測した。その方法を以下にまとめる。

I) 対象学生：

- ① 本学工学部1年 専門基礎必修の物理学I 履修者 54名
- ② 本学薬学部1年 選択必修の化学平衡 履修者 147名
- ③ 論文作成を一通り経験済み(文章作成力が向上している)の比較対象として同志社大学大学院工学研究科1年 安心安全機械の設計講座 履修者 44名

II) テストの1問として高度専門知識を要しない対立テーマについて400字制限の小論文を書かせることとした。各計測対象に課したテーマは以下である。

工学部：力学はとてもおもしろい⇔力学はあまりにつまらない

薬学部：酸塩基平衡はとてもおもしろい⇔酸塩基平衡はあまりにつまらない

同志社大学院：システム安全はとてもおもしろい⇔システム安全はあまりにつまらない

III) 文章作成力計測：各提出文章を以下の4項目で数量化して統計解析を行った。

誤字、読みにくい字：多い(1点), 少ない(2点), ない(3点)

基本文法(段落初め字下げ, 主語・述語一致, 2重構造, 不適切漢字, 送りがな等)

：無視(1点), 時々あるが気を付けている(2点), 適切(3点)

字数制限順守：無視(1点), 努力しているが3行以上残(2点), 適切(3点)

論理展開： 無視(1点), 努力しているが感情論(2点), 適切(3点)

統計解析の一環で以下の帰無仮説を立てて、Pearson のカイ2乗独立性検定を行った。

仮説 H0：2つの属性「学生の所属」と「文書作成のミス」は独立である。

有意水準5%として仮説が成立したのは「基本文法」であった。つまり基本文法のミス発生は、所属と独立(関連がない=どこも同じ)である。他の誤字、字数制限及び論理展開は仮説が棄却された。つまりそれらのミス発生は所属により異なる。

以上から、本学の工学部と薬学部で正確な日本語を書く教育の提案を表1にまとめる。

表1 正確な日本語を書く教育の提案

教育のねらい	初年時	専門基礎	
		工学部	薬学部
1)文章作成の基本	○	○(教材共通)	
2)実験ノート作成	○		○
3)科学技術者の順守すべきルール	-	○(教材共通)	
4)アカデミック文書作成の基本	-	○(教材共通)	
5)文書作成の知的テクニック	-	○	要検討
6)知的な図の作成と作図力学	-	○	要検討
7)知的な表の作成	-	○	要検討

表に示した教育のねらい1), 3), 4), 5), 6) 7) に対応した教科書と演習書は以下である。

教科書：知的な科学・技術文書の書き方 中島利勝, 塚本真也共著 コロナ社 (演習書ベースであるため学生には必須ではない)

演習書：知的な科学・技術文書の徹底演習 塚本真也 コロナ社

また教育のねらい2)については、工学部、薬学部での初めての実験の中で指導を強化する工夫を行うか、まず実験ノートを全員に持たせた上で正確に記録することの必要性を伝える集中講義を行うかで実行する。

更に、薬学部向け教育のねらい5), 6) 7) は専門基礎としての実施必要性を精査し



更に教育内容を工学部とは別に構築する必要がある。



## 2-6 言語教育は「メディアと表現」とどのようにつながるか

人間文化学部 メディア・映像学科 准教授  
内垣戸 貴之

言語はメディアの一種である。「メディア」というものが、他者との関係を媒介するものとして位置づけられる以上、言語のその範疇であり、少なくとも言語とメディアの接点は多分にあると言える。例えば、言語能力の一角をなす「読解力」についてである。

読解力は OECD が実施する PISA 調査で 2003 年、2009 年で対象となっているが、OECD の定義では「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」とされている（文部科学省、2005）。また『読解リテラシー』の測定で扱われる素材には、自然科学、社会科学、人文科学などさまざまな領域の文章だけでなく、図・表・画像・イラストなど多種の資料や簡単な数字の読み取り、計算が含まれる」とされる（鎌田、2006）。これまで言語教育が主に対象としてきたさまざまな文章、いわゆる連続型テキストに加えて、図・表・画像・イラストなどの非連続型テキストも扱うことになったわけだが、後者はメディアや表現を扱う分野などとの親和性が高く、少なくとも言語教育という話題とメディアという分野は確かに接点がある。

しかし、大学教育における「言語教育」という枠組みで考えたとき、ただの包含関係で片付けられるほど単純ではなくなる。それはなぜか。

教育という行為は、内容や配列を意図的に精査・デザインし、より効果的なカリキュラムとして整備する必要がある。ここでいう意図に含まれる重要な要素の一つとして、「大学教育の質保証」と非常に関連性の深い「学習者の実態」がある。例えば入学時に行われる英語に関する学力のプレイスメントテストは、学習者の実態を把握するための一つの方法であり、その結果による習熟度別クラス編成は適切な言語教育環境を整備し、質を保証するために不可欠なことと言えよう。そのように「本学科学生の実態」に合わせて言語教育がフォーカスすべき内容を考えたとき、現状の言語教育関係のキャパシティで、メディアの持つ多様性を十分に網羅できるだけの時間的な余裕がある状況とは言いがたいからである。



それでは学科の現状において、言語教育・言語能力はどのような位置づけになっている

のか。メディア・映像学科のディプロマ・ポリシーでは、次のような項目が言語能力に関わるものとして挙げられる。

- ・社会の事象や個人・集団を深く理解し、またそれらを適切な形で表現するための言語能力を有している。
- ・多様な表現や創作をするための手法理解とそれを実践する能力を有している。
- ・受け手の印象やインタラク션을コントロールするためのデザインやコミュニケーションの企画・構成能力を有している。

「社会の事象や個人・集団を深く理解し、またそれらを適切な形で表現するための言語能力を有している」という項目では、他者や対象を理解する手段としての言語能力を前提に、他者や外界とつながるためのコミュニケーションツールとしての言語能力が重要となる。ここで想定される言語能力の中心となるのは、いわゆる一般的な言語であって、図・表・画像・イラストは補足的なものとなる。

「多様な表現や創作をするための手法理解とそれを実践する能力を有している」、「受け手の印象やインタラク션을コントロールするためのデザインやコミュニケーションの企画・構成能力を有している」の2つは、図・表・画像・イラストなどを表現の対象として扱う能力であり、これらにおいても図等はあくまで制作する対象である。本学科で考える表現や作品制作とは、企画書やプレゼンテーションなども含めた総合的なコンテンツや活動であり、作品そのもののメッセージ性についても、他者とのインタラクティブなコミュニケーションを通して表現しうるものと考えている。そこで使用される言語はやはり連続型テキストが中心となる。

このように、本学科のディプロマ・ポリシーにおいて表現そのものやそれらの企画・制作等に必要な言語能力が示されているが、図・表・画像・イラストなどを言語教育の対象としてではなく、メディア的なコンテンツとして扱うことがほとんどである。それは多種多様なメディアコンテンツが扱われる今日の社会で求められる言語能力を考えたときに、メディアコンテンツやそこに含まれるメッセージを共有しやすい連続型テキストに変換していく力が重要になるからである。

今後、大学全体の言語教育の方向性などを踏まえつつ、連続型テキストと非連続型テキストの双方を効果的に扱う力を育成していくためのカリキュラムや、学生の実態に応じた仕組みを検討し続けていきたい。

文部科学省「PISA 調査における読解力」（最終閲覧日：2018年12月28日）

[www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/039/siryo/attach/1402990.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/039/siryo/attach/1402990.htm)

鎌田恵太郎「社会に参画するための能力育成を考える —特に「読解リテラシー」の視点から—」ベネッセ教育総合研究所 BERD（最終閲覧日：2018年12月28日）

[https://berd.benesse.jp/berd/center/open/berd/backnumber/2006\\_06/rep\\_kamata\\_01.html](https://berd.benesse.jp/berd/center/open/berd/backnumber/2006_06/rep_kamata_01.html)

## 2-7 学ぶ意欲向上へ向けての問題提起

薬学部 薬学科 講師  
大西 正俊

福山大学の薬学部は、ほとんどの学生が薬剤師になることを目指して入学してくる。薬学部が6年制になって久しく、薬学という学問の場から薬剤師養成という職能教育の場へと変遷し賛否ある中で、薬剤師国家試験の受験資格に「大学において薬学の正規の過程を修めて卒業したもの」との規定がある。この中の「大学」と「薬学」というキーワードは、「学問」を辛うじて暗に示していると考えられる。すなわち現在のところ、ヒトの生命を預かる以上、薬剤師は学問を修めた「大卒」に限られており、国家試験に出ることだけを教わった者はそれとは全く異なると言えよう。さて、薬学を学問として捉えた時に言語教育をどう考えるかであるが、情報収集および発信は、やはり英語で書かれた原著論文が主

である。したがって、本シンポジウムでは言語の中でも特に「英語」に焦点を当てたい。

薬学部では、文部科学省が「薬学教育モデル・コアカリキュラム」というものを細かく定めており、福山大学はそれに準拠するといった他学部とは少し異なる特殊な形態をとっている。本シンポジウムにおいて話題を提供するためにこれを詳細に調べてみたところ、「薬学準備教育ガイドライン（例示）」の中に「薬学の基礎としての英語」という項目を見つけた。平たく言うと、薬学研究者に必要な「読み・書き」、薬剤師に必要な「聞く・話す」が盛り込まれている。このガイドラインは、薬学生が初年時に学ぶべき指針とのことであるが、逆説的に考えると、6年間を通じて英語教育を行うカリキュラムにはなっていないのが現状である（福山大学も）。一方で、薬剤師国家試験の出題基準を見てみると、驚くべきことに、「英語」というキーワードが一切出てこない。後述のように、だからと言って全く出題されないわけではないが、大学で学位を取得することではなく、国家試験に合格することをゴールと考える福山大学の学生にとって、英語を学ぶ理由を見出せない可能性は高いだろう。したがって、薬学部においては、言語教育を考える以前の問題として、いかに学生のモチベーションを上げていくかが最大の課題である。「薬学」の考え方を広げ・深めようという知的好奇心は、日本語であれ英語であれ言語を通して達成されるからである。

以下に興味深い例がある。福山大学では、3年次、4年次においてCBT（Computer-Based Testing；言わば薬局・病院実習のための仮免許）対策演習が活発に行われる。筆者は、同時期に別の科目を開講していたことがあるが、その授業評価アンケートの自由記述欄には毎年のように「この時期に CBT 以外のことをやらないで欲しい」旨の内容が見られた。一方で、関西のある国立大学において同様の CBT 対策を行ったところ、学生から「実験の時間がなくなるから CBT 対策をやめて欲しい」との声が上がったとのことであった。いずれの学生においても教員に独りよがりなクレームを入れる振る舞いはさて置き、前者は「試験に出ることだけを教えて欲しい」、後者は「学問の時間を削らないで欲しい」という内容であり、同じクレームでもレベルが全く違う。福山大学では薬剤師を目指し、国立大学では製薬会社を目指すといった違いはあるかもしれないが、それ以前に、大学に入学した以上、学問を修めて学位を取得する目標は共通していなければならないはずであり、理由にならない。着目すべきは、3年次の時点で学生の考え方に差がはっきりと出ている点であり、このことは、初年時教育の重要性を示していると考えられる。英語ではないが、言語に関連する例をもう1つ挙げよう。それは、記述式の試験において、正しい日本語が書けないどころか、記述する意義すら見出せない学生が少なからず存在するという点である。国家試験がマークシートであることが影響していると考えられる。本シンポジウムの結語として強く言いたいことは、言語を学ぶ以前の問題として、「大学とはなにか」、「学問とはなにか」ということをなるべく早い段階で理解させること、すなわち、『学生の意識改革』が必要ということである。そのために何をすればよいかであるが、各教員が自身の研究分野の面白さを初年時から伝え続け、本来の学問へ学生の意識を向け、それには言語・英語が必須なのだとして理解させる試みを是非提案したい。福山大学の学生には、もちろん「成績」も重要であるが、言語を使いこなして、何か1つでも誇れる「業績」を残して卒業してもらいたいと願ってやまない。

蛇足ではあるが、シンポジウムでは、第103回薬剤師国家試験に初めて英語が出題されたことを紹介した。薬剤師の業務に直結した論文読解問題であり、良問であった。今の薬学生の言語能力に危機感を抱いて出題されたのであれば、委員の先生に敬意を表したい。これまで述べてきたように、「薬学」に裏付けされた質の高い薬剤師を輩出するためには、今後、言語教育は必須のものとなるだろう。ひいてはこのことが、学問の発展につながり、結果として、薬学教育および薬剤師教育の両者において、よりよい正のサイクルが形成され



ると期待される。

問 304-305 産婦人科の医師から、医薬品情報室に「帝王切開前の皮膚消毒に用いる消毒薬として、クロルヘキシジンとポビドンヨードのどちらが手術部位感染を予防するのに良いか。」との問い合わせがあった。

情報収集の結果、クロルヘキシジン（2%クロルヘキシジングルコン酸塩+イソプロピルアルコール）群と、ポビドンヨード（8.3%ポビドンヨード+イソプロピルアルコール）群を比較した論文を見出し、表に基づいて説明した。

ITT (Intention To Treat) 解析による評価結果

Outcome	Chlorhexidine-Alcohol (N=572)	Iodine-Alcohol (N=575)	Relative Risk (95%CI)	P Value
<b>Primary outcome</b>				
Surgical-site infection — no. (%)	23 (4.0)	42 (7.3)	0.55 (0.34-0.90)	0.02
Superficial incisional	17 (3.0)	28 (4.9)	0.61 (0.34-1.10)	0.10
Deep incisional	6 (1.0)	14 (2.4)	0.43 (0.17-1.11)	0.07
<b>Secondary outcomes</b>				
Median length of hospital stay — days (IQR*)	4 (3-4)	4 (3-4)	—	0.24
Physician office visit — no. (%)	45 (7.9)	72 (12.5)	0.63 (0.44 0.90)	0.009
Hospital readmission — no. (%)	19 (3.3)	25 (4.3)	0.76 (0.43-1.37)	0.37
Endometritis — no. (%)	8 (1.4)	11 (1.9)	0.73 (0.30-1.80)	0.49

\* IQR : interquartile range

「A Randomized Trial Comparing Skin Antiseptic Agents at Cesarean Delivery. N Engl J Med 2016」を一部改変



### 3. 提言と討論

附属図書館長の青木でございます。図書館では、去年の後期から「注文の多い図書館」という読書推進システムを始めました。今日伺っていて、あの日本語表現法の授業の中でそれを実施しております。竹盛先生の方からお話があったんですけども、私達の今の図書館の試みは、アカデミックライティングを目指すための読書力の向上ということを目標にしています。というのが、書くというのは書くだけではダメで、読む力がそこにあって、読むと書くというのが一体になっていると考えているからです。この読書推進システムの一番の中核は、その2コース目の読書技能修得コースというところです。今、思うのですがその時に一番私たちが言語教育をする立場で、現代の可能性については、これはあの先程内垣戸先生の方からお話がありました、映像世代の若者たちであるということです。映像として認知したものをどうやってまあ、先生の言葉によれば非連続型テキストを連続型テキストにどうやって変換していくのか、そこがおそらく現代の言語教育の一番大切なところかと考えます。

それで私共のシステムはその言語習得のところに、1つの連続型テキストを認知するためのシンプルな型というものを設定してみたい。それを通して本を読むということのある程度学生にとってあんまり苦勞なくできるようになれば、それがだんだん読書に繋がっていくのではないかと。そしてその型が習得されると、書くときにもその型を使って書けるということを考えているからです。それはおそらく今は出来て無いですけど非常に数学言語みたいなシンプルなもので表されるものじゃないかというふうに自分では思っています。ひとつの型を別の型に置き換える力、あるいはひとつの型から新しい型を作り出す力とか、おそらくそういうものが文化理解とか文化創造とか。そういうものが一番大事なところではないかと考えております。

で、それで、そういう意味で最初に読書というのはいくら続けても途中から向上する力が止まってしまう、それはなぜなのだろうということを竹盛先生にお尋ねしたいですし、あるいは先程の内垣戸先生のお話ではあのメディア教育としては、連続型テキストは非連続型テキストに置き換えるそういう力を指導するんだとおっしゃった、それはどのように可能なのだろうかということをお聞きしたいと思います。

もう一つ、福山市の隣の府中市ってありますけど、府中市の国府小学校ってところがあって、そこは国語教育に力を入れている。それで国語は非常にやっているんだけど、それによって全国学力テストで成績がいいのは実は算数なんです。その校長先生がおっしゃったんです。それで数学言語っていわゆる我々の非連続、連続型テキストの認知とはどんなふうに関連するのか、小野先生に伺ってみたいなというふうに思います。論理性ということをおっしゃっていますので。以上です。



たくさん質問がおりなので、簡単にお話しします。

たくさん読めばいいというものではなく、むしろ読めば読むほど型抜きになっちゃう。それは楽しいから読むんであって、量はそういう意味はあるんだろうとは思いますが、ただいくら読んでも先生が最初の方でおっしゃった型ですね、パターンですね、そういうものを用意した読み方だろうと思うんです。読書における表現ですね。量に対して質だろうと思うんです。このことを意識しないでいっぱい読んでもポンポン入ってくるだけ。結局汎用型としてのパターンとしての必然性もあろうかと思いますが、最初の方に私が申し上げたのは、各学科の専門内容に照らしてのパターンというものもあると思いますが、大切なのはそれを質的に高めていくことが課題になると思うんですけど。

連続型テキストと非連続型テキストの話に関する質問を頂きました。十分には説明していませんでしたけどそう簡単に一方通行であるわけではなく、やっぱり行ったり来たりの訳



です。映像世代という言葉が出たので非連続型テキストから連続型テキストへの流れを説明する能力というと語弊があったかもしれませんが、例えばある作品でその作品を何となく好きです。よく何となくって何だという話になるんですよね。それを自分なりに説明してみるというプロセスですよね。例えば自分はこういうのが好きなんだとメタ認知したり、そういったものの繰り返し、今度は自分が作る時にこういうものを作りたい、こういうイメージ絵を作りたい、こういうシーンが欲しい、やっぱり言語としてイメージ化した上で作品に持っていくということの流れの中で、非連続型テキストと連続型テキストとかいうものが行ったり来たりもおそらく出来るんだろうなと思っています。その作品を見てくれ、作品で自分を飾るんだということがおそらく出来るかもしれないけど、社会においておそらく多くの学生が中小企業の見方で、少し通用しないやり方ですから、やっぱりこれはこういう意味があってしているんですよと説明できないといけないわけですよ。

だからどっちが始まりか終わりがではないですけど、少なくとも頭の中にあるものを動かしたり、何となくあるイメージを動かしたりすることのプロセスの中で映像力というものが付いてくるんだろうなと、期待できるわけですが、それはもしかしたら先生が言われるような型や、例えば資料で型とか重視するポイントとかキーワードを揃えてあげるとかあるのかもしれませんが、まあそこまでしっかり環境が揃えられていないので今後の課題かなと思います。

僕も本当のところよく分からないんですけど、もしかしたらやっぱり、当然、文章題とかあるいは数学の教科書の上とで、そういうふうなことでは、やっぱり日本語を理解する上でしか成り立たないんです。特に先ほど言いましたように数学でしっかり言葉を定義してその上で論議上しっかりやっていくということは意外と高校生以上の教科書でやることです。小学校は日本語がまず理解できていないと、文章そのものが理解できません。高校のように厳密に定義されてなく、イメージを大事にして、少し曖昧に書かれています。教育的配慮からですね、その辺でやっぱりそういう言葉が理解できるということが数学の理解に繋がると思うし、小学校なんで当然少ないですし、言葉が理解できないと比較的直結しやすいのかなと、日本語の理解が直接的に数学の理解に影響を与えます。言葉が理解できるって、こんなふうに想像します。これって、想像で申し訳ない。

横から口を挟みますけど、学力調査の中で数学の点数がいいと、軒並み点数が良くて、数学の力をあげるために国語をしっかりやろうということがたくさんあって、その関連性は現場の実感としてあるんですね。方法は多分全然違うと思うんですけど、今、先生が言われたように、少なくともやっぱりその小学校の算数でもあるんですけど、その状況がやっぱり言語を読んでいわゆるイメージ出来ない、そういうことを式に置き換えられないんですね。そういったところは多分あって、国語力と算数とか数学の義務教育段階ではあると感じております。

私は言語系の人間ですけど、例えば、語のコア的、中核的な意味と多義性の問題が、数学的な言語と関係があるように思います。「きれる」でみてみます。このナイフはよく「きれる」、彼は頭が「きれる」、彼はすぐ「きれる」。スパークと切れるという認識は、この3つ全てに通底しています。その共通のイメージが物理空間から心理空間へ、心理空間から感覚空間へと分化発展しています。数学に当てはめれば一種の相似形であって、型はくずれてないんですが、「きれる」イメージはどんどん膨らんで多様化していきます。私は文学畑の人間ですが、数学の公式というのは、例えば関数というのは、一定の共通項があり、それに変数を入れて様々な結果を生み出しています。この点で数学に非常に近いと思います。

経済学科の早川ですけれど、若松先生は英語の授業で単なる英語力の向上ではなくて姿勢を重視されているとおっしゃっていましたが、じゃ姿勢は何なのかなあという所で終わってしまったのでもう少しもしよろしければどういう姿勢を強調されているのか教えて下さい。

そうですね、まず姿勢というのはかなり曖昧な言葉なんですけど、ひょっとしたら学問に向かう態度といいますか、どういうふうに勉強すればいいのかではなく自分は何を知り

たいのかっていうところから声を発するというような思考、動かし方をイメージしている、掘んでいるところがあります。どうなんですかね、僕としては他の先生方も姿勢を定義するのはなかなか難しいのかなという気もしますが、学問に向かうその向かい方と言いますか、というところで考えています。

集中力、努力しないと前進できない。努力するというポテンシャルを持っているか、それから我慢する。私、英語をやっていますけど、我慢ですね、直感的にはなかなか分かりません。我慢する力。そういう、もちろん英語能力そのもの、コミュニケーション力をアップするよう努力してはいますけど、そこに付随的にある力ですね。その辺りの姿勢ではないでしょうか、直感的にはある意味じっと我慢してコツコツやるしかない。そういう学問の姿勢が若松先生の主張ではないかと思えます。

国際経済学科の中村でございます。ちょっと今企業の話になりましたので入社試験の、7年ほど前にですね、企業が社内の公用語を英語にしたんですね。ずっと続いているんです、これは日本のかなりいい例と言いますか、非常に関心の高いテーマでしてハーバードの大学院でも大変な人気を博している1例になっているんです。まあそういうことでその7年間続けた結果社内の社員食堂も全部英語に変えてありますからメニューは。それでTOEICで820点くらい取り分があったということで、中尾先生がおっしゃった集中力とかそういういったものがかなり上がっていると、当然第二ヶ国語を学ぶということは当然ですね。何と言いますか、それ以外でも1つの英語をペラペラ喋るとかそういう技術だけでなくそれ以外でも本来の会議に対する集中力とか真剣さ色々なものを伴っているのではないかと私は考えます。併せて日本を捉えた時に世界の大学ランキングにおいてケンブリッジでもフランスのパリ大学でもハーバード大学とでも絶えず競争して、英語力自体を伸ばすことが海外からの優秀な学生を引きつける要素になっている。そういった書物も幾つかありますしね。非常にそういう意味では日本も英語をとことん重視して今の段階でも相当論議の場でもそういった元々英語の力がないというそもそもの素質もありますので、ぜひこういう言語能力とか、とりわけ英語、中国語などいろいろありますが、そういったかなり重点的な今後のグローバルへの布石になるのではないかと私は思っております。これについて何か若松先生、ご意見はないでしょうか。中尾先生からのご意見があればありがたいと思っております。

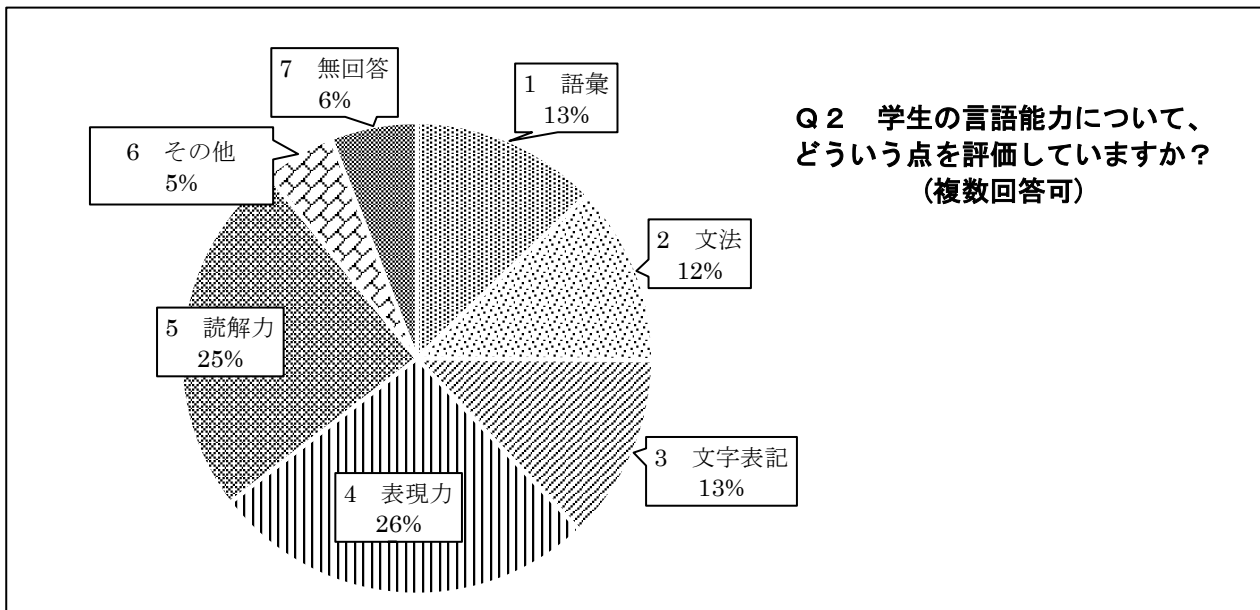
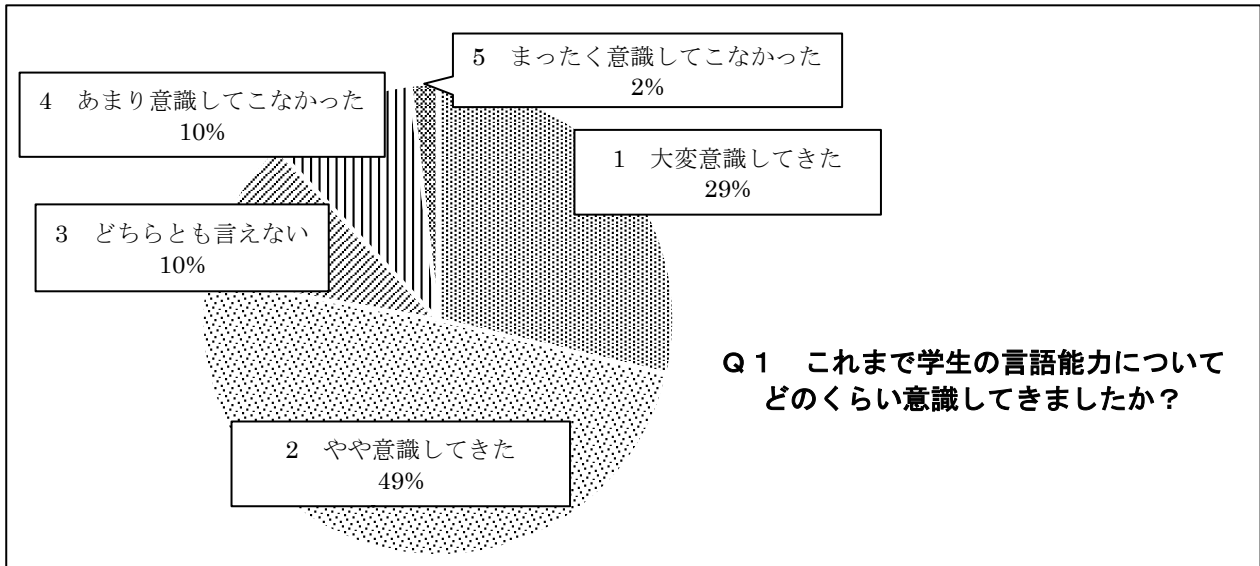
まず、大学ってどういう場なのかを一番最初に考えるべきかと思うんですね、大西先生も触れられていましたが、大学は、授業であったり、聞くだけの場ではないはず、ただ一方では現実的にそうなっちゃっているところはあるんですが、ただそもそも大学はどういったところなのか立ち止まって僕たちみんなが考えなければならぬ。で、まず、現状ぶっちゃけてしまいますと、英語力は、いわゆる英語力ですがこの大学に入ってくる学生は、その英語力のある学生は多くないと言っても過言ではないのではないかと思っています。もちろんできる子はいますがそのパーセンテージは低いという意味で全員が英語をできるようにという、そういう夢物語を語るのは間違いではないかと思っています。だからこそ、その大学と大学教育センターでみんな共通科目を与える者としては、大学はあるいは学部は、そなえるべき英語をどう捉えているのか、教えてもらいたいと思っているんですね。そうして実はスタートラインに立つことができる。これが現状ではないかと思っています。

英語力と言っても、母語以上の力まで到達することはできないというふうに思っています。ですから母語の力の厚みがないとやはり、外国語である英語の力は伸びません。そこで双方の厚み、外国語を知ることによって母語の特性への気付きを高める。母語の力を高めることによってまた外国語に目を向け、その力を更に高める。その行ったり来たりの循環性が大切なのだと思います。

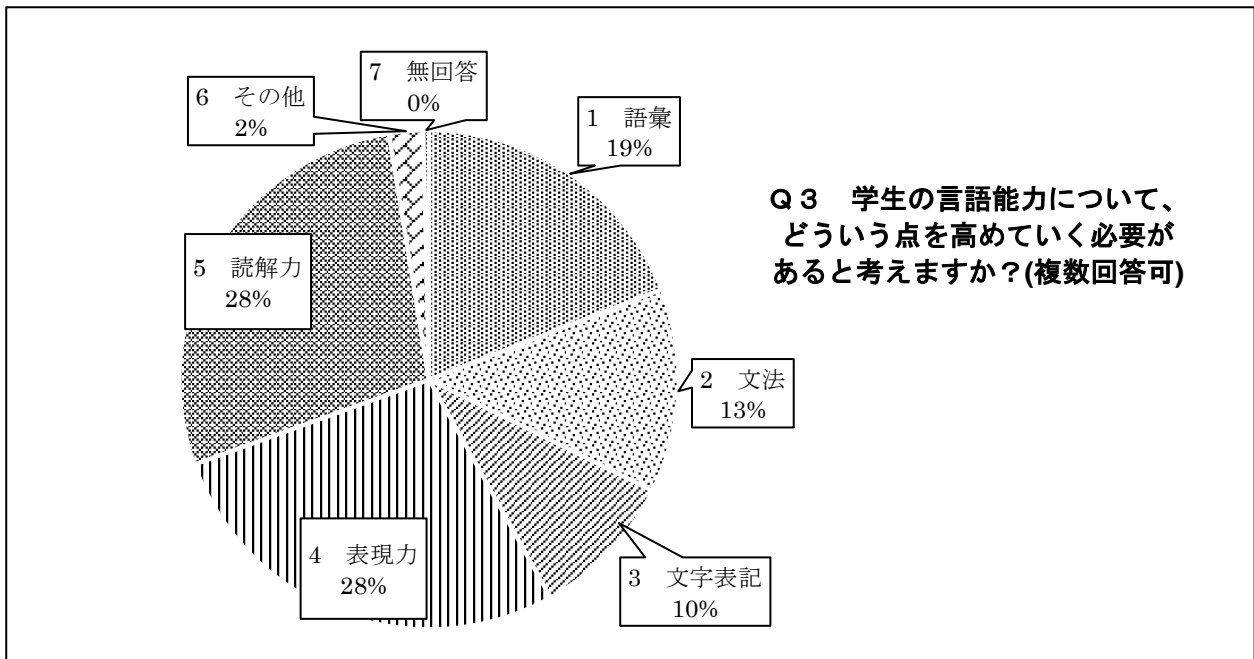
そろそろ質疑の時間もなくなってきました。ありがとうございました。

4. アンケートの回答分析

【1】「言語教育を考える」に関して、問題意識あるいは実践についておききします。



その他  
 全体的に低い、書こうとする姿勢、何とか表現しようとする姿勢、  
 分かり易い文章を書く能力があるかどうか、パラグラフ・ライティング、  
 記述力・論理性、聴きとる力、構成

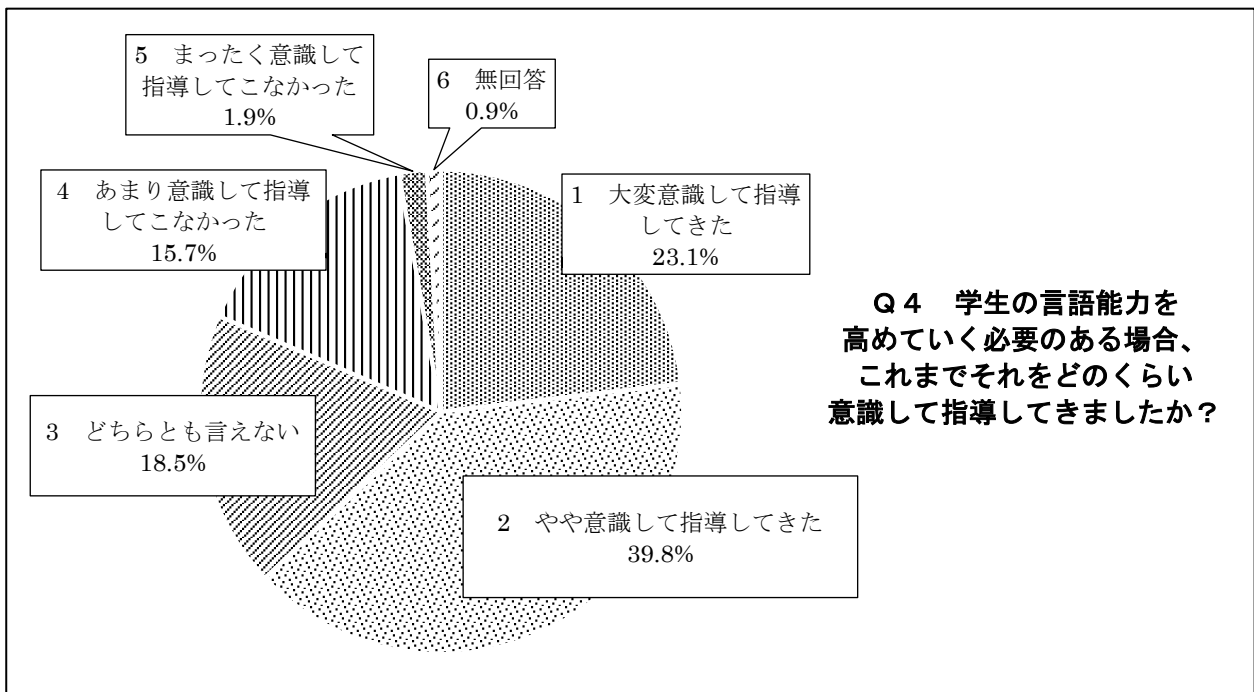


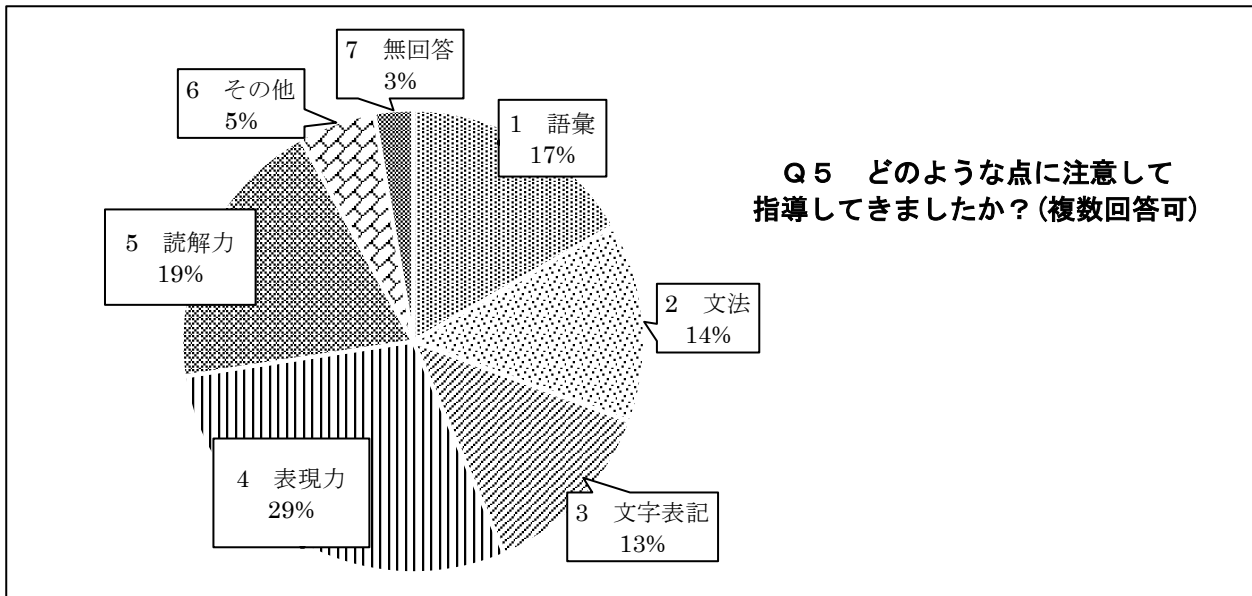
その他

聴きとる力、論理性、それぞれの学生によって異なるので難しい

文章を読んだとき誤った解釈をしない、文章を書くとき誤った解釈をされない能力

文章の統一性





その他  
 アカデミックライティング全般、文によって正確に情報を記録する力、卒論、指導する機会がない、レポートなどを書かせたり、演習問題を解かせたりする際には、「手本となる」設問の文章や模範解答の文章を「わかりやすい文章」とすることで、学生にとって学習しやすい配慮をしておく、文書作成、記述力、文章の構成、聴きとる力、他者の言葉を聴く力

**Q6 学部・学科の専門内容と言語能力についてどのように考えていますか？ (記述)**

■経済

- ・論理的な卒業論文を書くためには、言語能力は不可欠だと思います。
- ・経済学は言語による説明とその図示、その数学的表現の三位一体的に構成されている。そのことに気付いている教員も学生も少ないように思う。
- ・法律は、言語が前提になっている。大変重要である。意識して取り組んでいく必要がある。
- ・言語能力がつくということは、どんな人にも確実に分かり易く伝え合えることではないでしょうか。

■国際経済

- ・一般書と専門書のいずれに関しても、読書習慣がないため、読書スピードが遅いように思う。

■税務会計

- ・経営に関する専門用語は英語で表現されるものも多く、経営課題解決に関しても、論理的思考が必要となり、言語教育は非常に重要であると考えます。

■心理

- ・理系の要素が多く含まれているのに、それは理解せずに入ってくるので、1年次からレポート、その添削をすすめている。
- ・学問として“言語能力”とするのであれば、専門知識を理解したうえで先行研究を読み、自身の研究等に反映できるような能力。ただ、言い表すのが難しいのですが、他者とのコミュニケーションでも、言語、非言語を読み取るのも言語能力ではないかと思えます。
- ・本学科の学修のゴールの一つが卒業研究である。学生たちは自分の関心のあるテーマに関連した先行研究



を読み要約し、その中から自身のテーマを見つけ、そのテーマについて研究し、分析した結果を論文としてまとめる。また、自身の研究結果のプレゼンも行う。このプロセスにおいて上記のすべての言語能力は必須であり、また、このプロセスで向上していくとも言える。

#### ■人間文化

- ・本を読んで、自分の意見を自分の言葉で表現できるように指導する。
- ・聞く、読む、書く、話すすべての能力が不可欠であるが、どのような手立てで能力を高めていくのかという課題は簡単には解決できない状況を痛感している。
- ・人間文化学科では、言語能力を鍛えることが専門であるので、他学科との差別化をどうつけていくのが、重要である。

#### ■メディア・映像

- ・制作することは、何らかの「新しい言語」を作ることであると思うので、日本語、英語・映像言語等、あらゆる能力が必要と思います。
- ・低い。

#### ■工学部

- ・アカデミックライティングの機会が少なく、レポート（記述）を増やすと学生の負担、教員の負担が増えるが、教員としてはきちんと対応したいと考えている。
- ・日本語で社会人としての日本語が書けない。
- ・専門内容より、偏差値（基礎力）の影響が大きいと考えている。偏差値が低い背景が数値化される言語能力に影響していると考えている。
- ・卒業論文が書けない。
- ・誤解をしない読解力、誤解を受けない表現力（言語と文章）が必要（必須）であり、それを身につけるためには、正しい表現、専門用語の定義、伝わりやすい文章の組み立て（構成）を、日常的に実践して身に付けるほかに手はないと考えています。
- ・分断状態。

#### ■スマートシステム

- ・学科では表現力、コミュニケーション力が重要となるため、表記のみならず、口頭や身体での表現に注視している。

#### ■建築

- ・普段から新聞や本を読んでいないのか、文章作成能力が低い。
- ・当然関係あることなので、言語能力は重要です。

#### ■情報工

- ・プログラミングや能力に必要。
- ・工学の中でも比較的新しい学問であることから英語を使わない（触れない）で済ませる授業は非常に難しい。従って、学生には、積極的に英語に親しんで欲しい。

#### ■機械システム工

- ・技術者についても自分の企画したことや自分の開発した製品を売り込んだりするときには、相手を納得させるだけの会話能力が必要であること（英語については難解な文章は相手を誤解させるので×。できるだけ分かり易い文章を書くように指導している。）を理解させるようにしたうえで、文章を書かせるようにしている。

#### ■生物工

- ・卒研のプレゼンや卒論の作成。
- ・レポート、論文提出にあたって日本語力が低く、表現できない学生が多い。英語は必要な単語だけでも知っていてももらいたい。
- ・必要性和モチベーションを考える必要がある。
- ・専門内容において言語能力は非常に大切である。
- ・文中の主語と述語の明確化。

#### ■生命栄養科

- ・論理立てて説明することが必要である。教科書を筋を取って読み解く必要がある。
- ・国家試験問題を間違いなく読解して答えることが必要です。また、相手に理解してもらうための説明力、表現力も重要です。相手を把握する理解と発信力も要るのをなかなかできません。トレーニング法がないかと…。
- ・卒業論文の文章力・卒論発表での表現力をトレーニングしている。

#### ■海洋生物科

- ・学生の日本語基礎学力がベースとしてあることが前提となり、それぞれの学科で求められる力が異なるだろうと思うが、専門的分野で「使える」言語力を伸ばしたい。ベースとしての基礎力が大事な気がします。

#### ■薬

- ・用語の定義をしっかりとさせることが必要。
- ・文章作成能力、コミュニケーション能力が重要。
- ・専門用語を正しくかつ自在に使用し、多職種間（医療分野）の共通言語として使用できること。
- ・現状では外国語以前に日本語での表現ができていない。レポートの書き方の講座が必要。
- ・国家試験合格を目指すゆえに、学生は卒論作成をはじめ、国試対策を軽んじる傾向が強い。人にわかりやすく、要点をまとめて話したり書いたりする能力が低い。
- ・たとえば薬剤師国家試験を解くにあたって、薬学の専門知識に加えて、問題文の読解力が必要であると感じています。
- ・少なくとも英語論文は読めるだけの言語能力が必要であると考えます。

#### ■全体

- ・中学・高校で修得してほしい語彙力が不十分な学生が多い。一般的な新聞を読める程度の読解力も不十分な学生が多い。一方で自身の感情を短文で伝える能力はある。
- ・基本の習得。
- ・卒論作成に必要。
- ・マニュアルの読み書きができるように。
- ・学生が聞く話す機会がまだまだ少ない。
- ・分野に関わる言語能力の必要性に偏りはないと思います。
- ・Cerezoに文章を書かせていますが、なかなかよく書ける人が多いなと思います。または全く書けないか差が大きい。どちらが良い学生とはいえないが。
- ・学修や研究には表現力・読解力が不可欠で、それらを用いて論理的に表現する必要がある。
- ・母語をしっかりと学ぶことが外国語能力を高める力ではないでしょうか。

**Q7 「言語教育」の向上のために、われわれは「今何ができるか」、「今何をすべきか」、お考えを自由にお書きください。 (記述)**

■言語教育への取り組み

- ・日本語教育として以下のテーマで学生を手伝う形で指導する。
  - ①就職活動で自己PRや志望動機を指導するときは、学生はがんばる。
  - ②テストの問題で説明文を書く時、学生はがんばる。
  - ③レポートを書く時、学生は苦勞する。
  - ④臨地実習で、社会の人と接するときコミュニケーションが必要となる。
- ・文章を書くということは社会人として必須のスキルであるが、基本的にはトレーニングすれば身につくものであり、教員も添削できる少ないチャンスを最大限活かしていく必要がある。
- ・読む、話すなど授業に反映させる工夫をして、教員と学生とのやり取りを増やす。
- ・卒論の場合は個別指導。
- ・文章を書く機会を多数提供する。
- ・労を惜しまず、個別指導することが重要だと考えています。
- ・講義、日常会話でも不十分な誤解を招く表現、不適切な表現を見逃さず指導する必要があると思います。

記述式の試験を行うことを心がけています。

- ・言語の魅力が学生が実感できるような授業を提供すること。
- ・日頃の学生とのコミュニケーションに専門用語を多用する。
- ・報告書作成の指導等。
- ・日常程度の文章説明力修得、レポート作成過程等で扱う。
- ・手書きのレポートを作成させるべき。
- ・レポートを書かせて添削する。
- ・論理的な文章を多く読ませる書かせる機会を、学生が主体的なイメージで多く作ることができるのではないかと思います。
- ・試験を記述式にする。
- ・平素の小テストやレポートを課した場合、必ず添削をして学生に返す必要があると感じた。
- ・普段の会話や研究推進における討論。
- ・外国語、専門書を読めるようになるように、積極的にきっかけを作る必要があると感じました。
- ・言語教育を意識することに尽きる。
- ・4年間を有効に使って、少しずつ力をつけるしかないと考えます。
- ・教員自身が言語を使い、ある意味お手本として学生に示すことができると思う。
- ・現状のカリキュラムでは、学科単位での対応は難しいと思います。
- ・専門科目で語学を体系的に説明することは難しい。組織的教育は共通教育となる。
- ・1年から4年までの一貫した積み上げ教育が必要ではないか。動機付け&必要性を高める。(興味・関心の喚起)(ex.自分が関心を持っているテーマなので論文が読める。)
- ・多数の非常勤の先生にご協力いただき、少人数教育を行う。(もちろん専任の先生を増やす方がよいのは言うまでもない。)
- ・母国語を学ぶことが大学では遅すぎる。

■読書

- ・読書。

- ・読書量を増やす。
- ・読書への誘い。
- ・読書（大まかに読めというのではなく、こちらで目標を設定すると良い？）を薦める。
- ・大学生の間に読書をしておくべきだと思う。
- ・本をもっとたくさん読んでもらう。新聞を読んでもらう。
- ・ジャンルにとらわれず、「長きに亘って愛されている」作品（書籍・映画・マンガなど）を、読んだり観たりさせることがよいと考えています。（ロングセラーになるものには、その分「お手本となる」よい表現やよい文章も多く含まれていると考えられるので。）
- ・読書と対話のすすめ。

#### ■外国語

- ・外国語能力の向上に力を入れなければならない！
- ・英語教育としては、文法を単語から復習する必要がある。
- ・英語での講義あるいは英語を絡めた講義。
- ・適切な「要旨」を抽出、作成できる能力の向上を図る。英語で「三単現のS」がわからない学生を絶滅させる。
- ・将来において可能性が広がることを教える。初年次から教員の経験も含めて、必ず講義で触れる取り組みは面白いと思う。特に英語！

#### ■共通教育と専門教育の連携

- ・共通教育と専門教育の連携から。
- ・今年度はたまたま「日本語表現法」の先生と連絡をとり、1年生の様子を伺う機会がありました。他学科、他機関の先生との連携は、今すぐにでもできることかと思います。

#### ■入試から

- ・試験問題に選択肢の中から選ぶような問題ばかりではなく、道筋を立てて説明させるような問題を出題することにより、文章力、表現力、文法、表現を鍛えていくことも大事であると考えます。

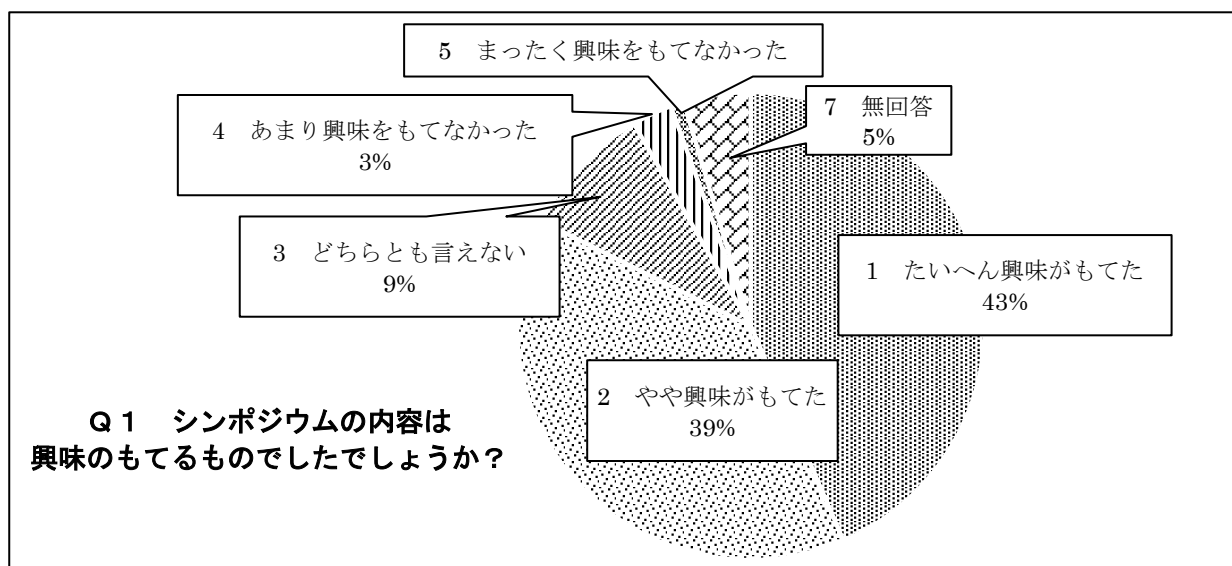
#### ■意識改革

- ・大西先生がおっしゃっていたように、早い段階での学生の意識改革が必要だと個人的には考えています。

#### ■全体感想

- ・「言語」とコトバではなく、「伝える」ための何かを考えた場合、広がりのある内容で面白かった。
- ・教育の現場のお話を聞くことができ、大変勉強になりました。
- ・数学の数字・記号は、書き表すだけで相手に伝わるとするのは、そのとおりですね。耳、目、すなわち視覚・聴覚を使って確実に伝えることが大切。聞き取ることが大切。
- ・言語がなければ、思考もできない。言語は人類の最大の発明。世界各地域の文化と言語のつながり。
- ・常に必要性を説く、良いきっかけや成功体験（もちろん失敗から“やっておけば…”となるばあいもありますが）ができるような場の提供（自身の気持ちや価値観などもあると思いますが）。

【2】今後、講演会・シンポジウムを企画する際の参考にしたいと存じますので、引き続きアンケートにご協力ください。



Q2 シンポジウムの内容について、ご感想をお聞かせください。（記述）

■評価

- ・現状がわかって良かった。
- ・いろいろな観点や考え方がおもしろかった。興味深かった。
- ・各学科から同じ問題に対する意見が聞けて良かった。
- ・興味深い内容だった。論理的な思考をするためには、言語力が必要であると痛感した。
- ・言語教育を軸に様々な視点からの話を聞くことができ、考えさせられる論点をご提供いただいたと感じました。
- ・言語教育は、非常に重要であると思われる。今回の2時間の討論では短いように感じた。継続的に考えていくべき課題である。
- ・言語教育には興味を持つことができた。
- ・それぞれ有意義な報告だった。特に、学生の言語力のデータ分析があり、興味深いお話だった。
- ・大学内連携の一部を見ることができた。言語教育にまじめに取り組んでいることを初めて知った。
- ・思っていたより、内容が濃かったです。
- ・短い時間で、様々な先生方の教育に対する考え方を理解することができた。ありがとうございました。
- ・日本語の大切さを改めて感じました。さらに英語の重要性を認識できました。
- ・有能な先生が多く、プレゼンも上手である。言語能力が高い証拠？非常に良い企画で準備もしっかりしてあることがわかりました。ありがとうございました。
- ・いろんな学問分野の先生方から言語教育についてのお話が聞けて、大変興味深かった。
- ・様々な視点が論理的に理解しやすく話され、大変興味深く、おもしろかったです。
- ・大変有意義でした。今後も同じような機会があればと思います。
- ・内容・発表方法共に引きつけられるものであった。
- ・パネラーの報告は多岐にわたるものであり、いずれも興味深かった。とりわけ理系における言語の意味は、文系における言語の意味を見返すうえで参考になったように思う。
- ・貴重なお話をありがとうございました。学生への声掛けを行っていただければと思いました。私自身でも、言



語の勉強をあきらめず行っていこうと改めて思いました。

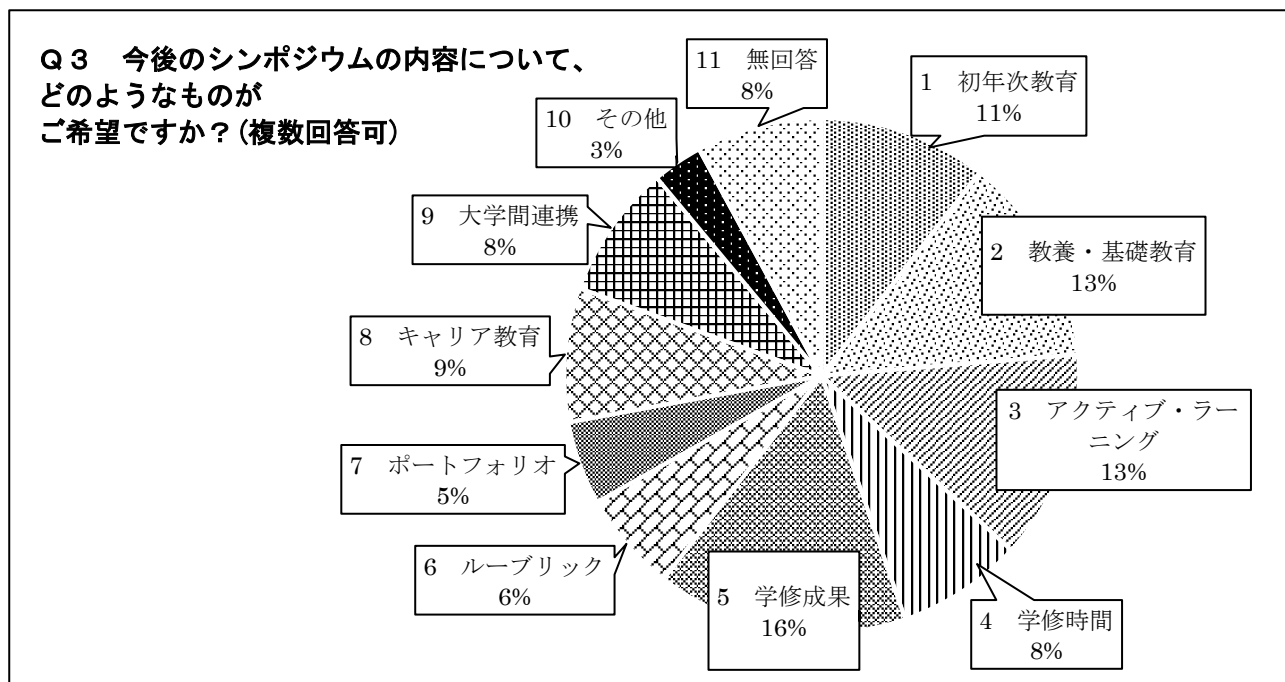
- ・これからの卒論指導に役立てたい。
- ・語学教育は大学において軽視されがちであるが、学生の授業アンケートの満足度は講義より高い。学生・教員のコミュニケーションが授業内において成立するからである。先生方の授業への取り組みに敬意を示したい。
- ・それぞれの講師の切り口があり、興味深く拝聴しました。「意識改革」が必要という大西先生の言葉に共感しました。日常的な記述の訓練は必要だと思います。
- ・本学の専任教員が、それぞれの分野の特殊性と共通にリンクする部分について発表があり、気付かされる部分が多かった。
- ・さまざまな視点から問題が提起されていた点が興味深かった。
- ・単なる語学教育の議論にとどまらず、広がりのある、本学の教育の在り方を見直す機会になったのではないか。
- ・内垣戸先生、大西先生の発表に納得でき、Very good!!発表タイトルとの整合性も取れている。
- ・教科内容を教えるのが精一杯だったが、言語も教育の視点から重要であることがよく分かった。実践できることは試していきたい。
- ・「言語教育」をテーマに領域を多様に、また現状からも概念からも考える機会となりました。先生方の教育に向かっておられる真摯な姿勢を感じました。
- ・同テーマを継続してぜひ行ってほしい。

#### ■問題の指摘

- ・「読み・書き・そろばん」の読むところができない学生が多い。したがって、卒業論文を書けない学生が増えている。
- ・現代の若者の言語表現能力については、いろいろな意見があると思いますが、感情的になってしまったり（今の若者はダメと決めつけたりしてはいけないのでは）、結論を急いだりするのではなく、「なぜ正しい言語表現が必要なのか」よく理解させたいうえで、その成長を助けるのがよいのではないかと思います。
- ・学科学生の読解力について、相対的に知ることができ、大変ためになりました。毎年でなくてもよいので、こういった能力データを共有させてほしいです。
- ・内容が多岐に渡り、複雑だと思った。
- ・聞くのがつらい。

#### ■改善のための提言

- ・日本語（国語）にフォーカスした方がよかったかもしれない。
- ・統計的分析（具体的エビデンス）に基づいたプレゼンに重点を置いてほしい。
- ・発表者の数が多すぎたと思います。討論の時間をもっと確保してほしいです。
- ・あまりイメージが湧きませんでした。プログラミング言語の話とか聞きたかった。言語の多様性、起源、進化とかも。
- ・全学の共通意識を持つきっかけとなると思います。とても良い機会を提供してくれたと思います。最後、発表資料が配布できたらよいと思います。
- ・討論が中心になるほうが良かったのではないかと考える。報告と質疑のみ。パネラーが複数いる必要性がない。



(アンケートの集計は、大学教育センター 日暮美紀先生のご協力によるものである。ここに記して謝意を表したい。)

## 5. 総括

### 「言語教育」への道筋

大学教育センター 教授 中尾佳行

#### 5-1. 第5回教育改革シンポジウム「言語教育を考える」への経緯

この度の第5回教育改革シンポジウム「言語教育を考える」は、2017年度秋から企画を温め、以下のように準備を進めてきた。

2017年10月4日

大学教育センター教員会議において大学教員センター企画シンポジウム「言語教育を考える」を提案。

2018年3月6日

大学教育センター教員会議において「言語教育を考える」シンポジウムの骨子を提示し、意見交換。

2018年4月25日

第1回実行委員会：ワーキングメンバー（竹盛、若松、劉、ローズ、中尾）

学生の言語の力を見直し、言語教育の在り方を見直し、福山大学「言語教育プログラム」の構築を目指すことを確認。

2018年5月24日

第2回実行委員会：ワーキングメンバー（竹盛、若松、劉、ローズ、中尾）

パネラーは学生の言語能力の現状認識を行う、言語能力の理論的基盤は背景に留める、共通教育と専門教育の両方から話題提供する。パネラーに数学系を含める。

2018年6月27日

第3回実行委員会：ワーキングメンバー（竹盛、若松、小野、劉、ローズ、中尾）

学生の言語能力を現状認識し、それを踏まえ「今何ができるか」、「何をすべきか」を話題提供する。

専門学部のパネラーの確定：関田（工学部）、内垣戸（人間文化学部）、大西（薬学部）。

2018年7月25日

第4回実行委員会：ワーキングメンバー（関田、内垣戸、大西、竹盛、若松、小野、劉、ローズ、中尾）

専門学部の立場からの話題提供（関田、内垣根、大西）と意見交換。共通教育と専門教育の循環性。

2018年8月31日

第5回実行委員会：ワーキングメンバー（関田、内垣戸、大西、竹盛、若松、小野、劉、ローズ、中尾）

7名のパネラーが、資料に基づいて発表。意見交換。シンポジウムの流れの確認。アンケートに関する意見交換。

2018年9月14日

第5回教育改革シンポジウム「言語教育を考える」



## 5-2. 「言語教育を考える」将来への道筋

学生の多様化が進むなか、学生の言語能力をあらためて問い直してみる必要がある。本シンポジウムを通して、学生の思考力、コミュニケーション力について、私たちは日々どのように実感しているのかを共有することができた。

学生の言語能力の実態を改善していくためには、各学部・学科に通底するものとしての「言語教育」を構想し、学生の言語能力に関する問題意識を共有化することが緊急課題である。各パネラーの課題提供から、教員間の全学的な有機的連携の必要性を確認できたのではないか。

私たちが問い直すのは触媒としての「言語教育」である。共通教育における狭義の言語教育だけを言うのではない。共通教育とも連動しながら専門各々で営まれる、言葉を軸に定位し直したところの専門教育そのものの問い直しである。

本シンポジウムを終えるにあたり、言語教育を分析的に見てみると、少なくとも3つの要素が共通教育及び専門教育に通底するものとしてあるのではないか。これは、言語教育を考える際の見取図となるはずである。すなわち、「What」、「How」、「Why」を循環させる

こと、折に触れてこのことを意識することが重要である。「何を学ぶのか」、「どう学ぶのか（学ぶことを学ぶ）」、「なぜ学ぶのか」、これら3つの要素を行き来しながら、日ごろのコミュニケーションのみならず、授業での教材開発、また指導法を見直していくことが要求されるのではないか。そのような営みの積み重ねの向こうには、学部・学科を超えた言語教育の共通項のようなものが見えてくるのではないか。

